住む人・使う人が主人公！

私たちは住む人・使う人の
立場に立って設計しています。
お気軽にご相談下さい。

京都建築事務所

〒　604－8083
京都市中京区三条柳馬場東入中之町１０
代表取締役社長　　川下　晃正
TEL　（075）211－7277
FAX　（075）211－7270
http://www.kyoto-archi.co.jp/

〒601-8382
京都市南区吉祥院石原上川原町21
http://www.creates-k.co.jp

クリエイツかもがわ

TEL 075（661）5741
FAX 075（693）6605
送料何冊でも240円

◉みんなが笑顔になる〝目からウロコ！〟のフレイルチェック

健康長寿

鍵は〝フレイル〟予防
自分でできる3つのツボ

東京大学
高齢社会総合研究機構教授
飯島勝矢 編著
B5判164頁　総カラー
2000円＋税

まちぐるみで取り組む
フレイル予防活動の
バイブル

市民、サポーター、行政職員、地域の元気シニアが、同世代市民と取り組む「気づきの場」＝フレイルチェック！フレイル研究の第一人者が贈る新たな科学的知見に基づく、フレイル予防の基礎知識から導入方法とフレイル予防事業に取り組む先進自治体からの報告。

認知症の人に寄り添う

在宅医療

精神科医による新たな取り組み

平原佐斗司 監修　内田直樹 編著

認知症診療に、在宅医療という新たな選択肢を！

精神科医や認知症専門医が病院を飛び出すことで、認知症診療に与える新たな可能性と認知症在宅医療の最先端を紹介。

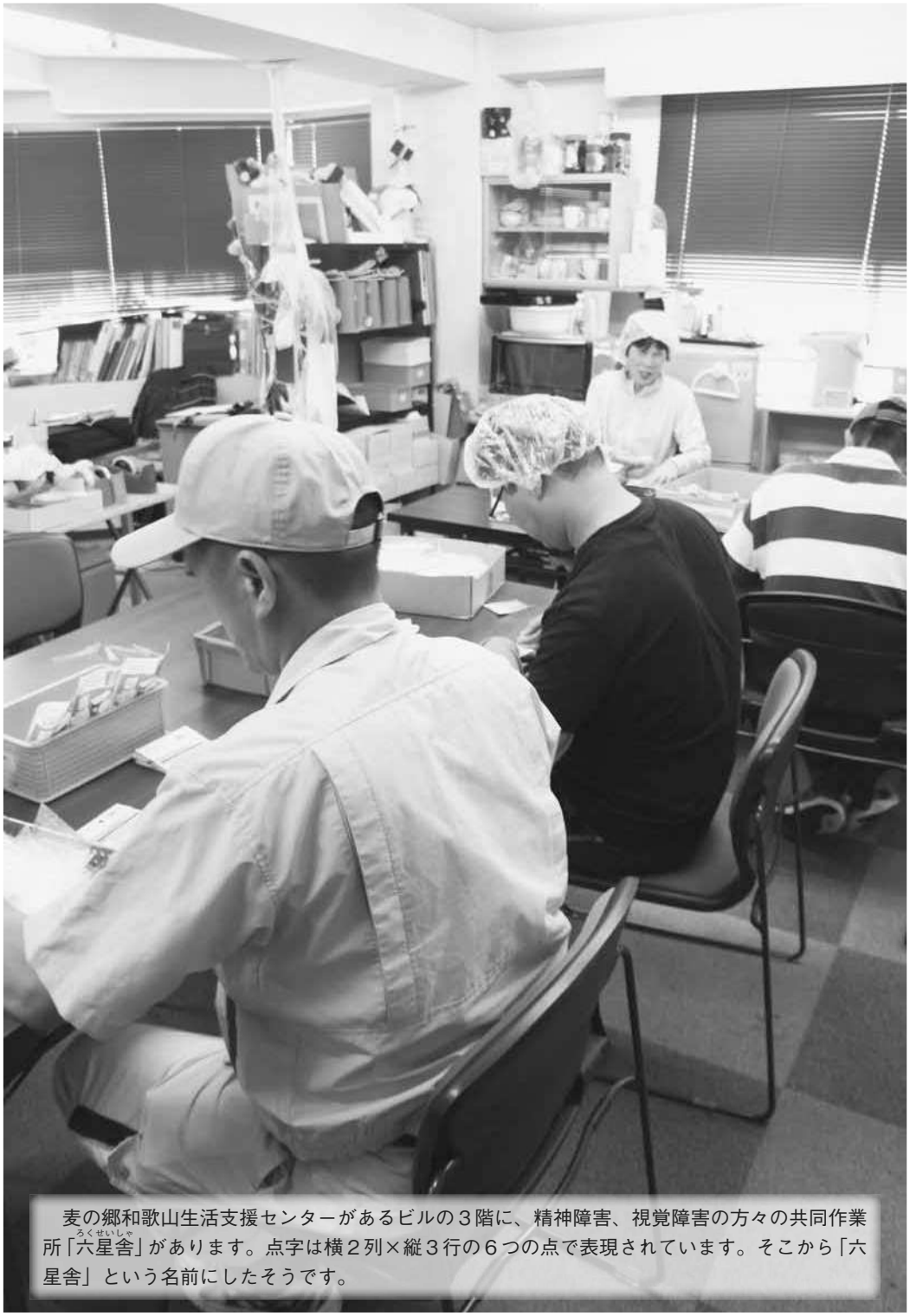
A5判232頁　2200円＋税

このまちで ふつうに 暮らしたい

精神障害者が地域で、ふつうに、暮らすために

人となじめない、地域となじめない、言いようのない漠然とした不安におそわれる。精神障害者の方々が地域でふつうに暮らす場合、困難がともないます。そんなとき、それらの思いを受け止め、地域で支えるネットワークやしくみがあればと思うのです。社会福祉法人一麦会（いちばくかい）麦の郷のとりくみから地域であたりまえに生活することを考えてみました。

麦の郷和歌山生活支援センターでは、当事者同士による悩み相談、交流をおこなっています。古谷忠央（ふるやただひさ）さん（写真左）は、「２年前から仕事の合間にピアカウンセリングの勉強をがんばっています」と話してくれました。ピアカウンセリングとは、障害をもつ人同士お互いがカウンセラーとなって話し合うというものです。共感し受け入れてくれる仲間の存在は、自立して社会で生きていくための重要な存在です。



麦の郷和歌山生活支援センターがあるビルの３階に、精神障害、視覚障害の方々の共同作業所「六星舎（ろくせいしゃ）」があります。点字は横２列×縦３行の６つの点で表現されています。そこから「六星舎」という名前にしたそうです。

六星舎では手織り手法のひとつ「さをり織り」でポーチやペンケース、テーブルクロスなどを作成し、販売もしておられます。すでにポーチは完売でした。「六星舎」に通う仲間の仕事は、一つひとつの工程をていねいにきっちりと仕上げていきますが、作業に見合った賃金が払われているかというと、そうではありません。現在、全国的に障害者の多くが自立できるだけの収入を得られていない状況にあります。（写真・文　高倉　弘士）

福祉のひろば
2018年9月号

【ひろばトーク】
精神障害者が地域で人として暮らせるために　白石雄二　6

●特集●　精神障害者が地域でふつうに生きる
【座談会】地域で、あたりまえに、生活したい！
——そして、その思いを支える実践とは
田中敬子／上田路子／下川紘典／野中康寛／山本耕平　10
精神障害者が生きる／活きることが保障されない社会で
山本耕平　22
沖縄の精神障害者私宅監置を考える　編集主幹　30
精神医療のあり方を問いかける
——全国精神医療労働組合協議会にお話をうかがいました
編集主幹　36
今こそ精神障害分野に風を　池山美代子　45

●トピックス●
６年前にひろばをつくった若者たちはいま　申　佳弥　48

●連載●
社会福祉研究に人生あり！
大学院生から大学教員へ　相澤與一　58
相談室の窓から
「しんどい」につつまれた本当の意味　青木道忠　62
育つ風景　絵を描きたい？　描きたくない？　清水玲子　64
「助けて！」って言ってもええねんで！
災害時の孤立・孤独をどう防ぐか　徳丸ゆき子　66
ひととしてあたりまえに生きたい
学生生活がおわり、就職　清田　廣　68
映画案内
わたしは、ダニエル・ブレイク　吉村英夫　70
現代の貧困を訪ねて　災害大国日本の自衛隊　生田武志　72
似らすとれーしょん道場　似顔絵まんがアート
インバウンドなのじゃ～！　ラッキー植松　74
ホームレスから日本をみれば　ありむら潜　76
花咲け！　男やもめ　川口モトコ　77

みんなのポスト　56／福祉の動き　78／今月の本棚　81/
●グラビア●　このまちで　ふつうに暮らしたい
精神障害者が地域で、ふつうに、暮らすために

●表紙の絵●
神門やす子

ひろば トーク

精神障害者が地域で人として暮らせるために

すずめのお宿家族会　白石（しらいし）　雄二（ゆうじ）さん

精神疾患は、生涯に五人に一人がかかるといわれ、だれもがなりうる疾病です。統合失調症、うつ病、適応障害などの精神疾患を抱える人は三九二万人と、糖尿病やがんなどの全疾病のなかでも一番多いのです。昨年発生した、大阪府寝屋川市での監禁凍死事件。背景には、国が半世紀にわたり、「精神病者監護法」で座敷牢に入れることを家族に義務づけた差別・偏見の歴史があります。今年は、精神科医・呉秀三（くれしゅうぞう）が座敷牢の悲惨な実態を告発し「精神病者の二重の不幸」を憂いてから、一〇〇年になります。

戦後も「旧優生保護法」（一九四八～一九八六年）により、一万六五〇〇人の障害者が強制不妊手術を受けさせられていましたが、国はなんの謝罪も補償もしていません。根底には、障害の有無や「能力」で人の優劣や価値を推し量る「優生思想」があり、それは、相模原殺傷事件やヘイトにみられるように、私たちの社会の隙間に入り込んでいます。

日本は「安上がり隔離収容」として、世界の「脱施設化」の流れに逆行してきました。日本の人口は世界の一・六％ですが、精神病床数は全世界の二〇％、日本の総医療病床数の二四％を占めています。入院患者の三人に二人は一年以上の長期入院で、先進国の入院平均一八日とくらべても「社会的入院の解消」にはほど遠い状況です。入院の四〇％は「強制的入院」で、入院中の身体拘束が一万件を超え、ここ一〇年で二倍に。拘束による死亡事件も立て続けに起きており、病院という密室で人権侵害が横行しています。

先日、全国の精神科病院でつくる「日本精神科病院協会」の会長が、協会の機関誌に寄せた文章で、「精神科医にも銃を持たせてくれ」という部下の医師の意見を引用していたことが報道されました。患者・家族は背筋が凍る思いです。一九六〇年代に、当時の日本医師会会長が「精神病院は牧畜業」と発言したことを想起させます。

しらいし　ゆうじ

1950年生まれ。当時高校生の子が統合失調症を発症し、妻とともに東奔西走。退職後、家族会活動へ。心の健康基本法制定運動を通じて、家族連絡会を立ち上げる。（公社）福岡県精神保健福祉会連合会（福精連）の事務局として、みんなねっと福岡大会、交通運賃割引適用運動等に参加。

現在は、福精連理事、（社福）福岡あけぼの会評議員、ふくおか家族連絡会・すずめのお宿家族会副代表として活動中。似顔絵は、勤めていた事業所の利用者の方に描いていただいたものです。

精神科病院をなくし、地域で丸ごと支援するイタリア。三大疾病としてＡＣＴ（包括的地域生活支援）的アウトリーチ中心の医療福祉施策をすすめているイギリスやデンマーク。日本に次ぐ民間精神科病院大国だったベルギーでは、入院病床を半減させ、その予算とスタッフを地域で暮らすための支援にあてる福祉施策をすすめています。

病気や障害は、その人の一部にすぎません。入院生活が長引くほど、意欲と生活力は低下していきます。精神障害も認知症も、住み慣れた地域で必要な医療・福祉の支援をうけながら、その人らしく暮らしていくことで自信を取り戻し、回復も進むのです。私は、ＡＣＴなど地域の支援者が、孤立していた当事者と家族を訪問し、本人のニーズにとことん寄り添い、笑顔をとりもどす姿を目のあたりにしています。早期の医療と生活支援により、重症化を防ぎ、回復が早いとの報告もあります。

「公益社団法人全国精神保健福祉会連合会（みんなねっと）」（家族会）の全国調査では、「重度かつ慢性」であっても、七五％の人が入院せず地域生活を送っています。社会参加し、就労、結婚や子育てをしている人も多くいます。所得保障と生活全般のサービスが行きとどけば、一市民として身近な存在となり、理解も進みます。障害者権利条約（権利の主体・他者との平等）と、日本国憲法二五条（人間らしく生きる権利）、一三条（幸福追求・自己決定権）、一四条（差別を受けない権利）をものさしに、家族丸投げ・入院偏重から地域生活中心へ、〝待つ〟支援から〝届ける〟支援への転換が必要です。

病気や障害があっても、人として「ふつう」に地域で暮らせる、だれもが住みやすい社会をつくるために、家族の一人として希望をもって歩んでいきたいです。

特集

精神障害者が地域でふつうに生きる

『精神病院はいらない！　イタリア・バザーリア改革を達成させた愛弟子三人の証言』（現代書館）という本は、二〇一六年に発刊されました。（この本は、二八〇〇円＋税ですが、なんと『むかしＭａｔｔｏの町があった』という映画のＤＶＤ２枚が付いています。）

この本の第七章に「対談　映画『むかしＭａｔｔｏの町があった』の見どころ」と題して、ジャーナリストの大熊一夫と精神科医の伊藤順一郎の対談が掲載されています。

沖縄県の精神障害者の私宅監置問題もとりあげました。沖縄は、一九七二年まで私宅監置の拘束が制度としても残されていました。どうしても、イタリアのトリエステというまちの精神保健サービスへの道を、精神科医である故フランコ・バザーリアの道を、この特集で紹介すべきと考えました。

「Ｍａｔｔｏの町」とは精神病院のことです。映画は、一九六一年に精神科医のバザーリアがゴリツィア県立精神病院長に赴任するところからはじまり、一九七八年の精神病院廃止法（一八〇号、別名「バザーリア法」）の成立の二年後で終わります。

大熊氏は、バザーリアや彼の仲間たちが語る施設とは、ずばりマニコミオ（精神病院）のことで、そこは、自由剥奪とか、管理とか、支配とか、隷属とか、抑圧とかがルツボで溶かされたような場所だと指摘しています。そして、「それが治療にふさわしくないということを、故バザーリアに代わってイタリア国営テレビが、お茶の間の国民に示した。実に二一％以上もの高視聴率でした」と紹介しています。この映画は、イタリアという国が精神病院をどう乗り越えたのかを全国民に示したのです。

伊藤氏は、二〇世紀後半から精神病を巡る状況は大きく変わった、と指摘します。治療とかリハビリテーションという概念が明確になったことと、もう一つは、回復にあたって医療のやれることは限られており、生活を続け、学び、働き、人を愛し、そのなかで安心感や自尊心をとり戻す、そのための工夫が、何より意味があるということです。精神病院は、その成立のときから社会防衛的な役割をもち、それを構造に取り込んできました。バザーリアがとりくんできたのは、歴史的必然に根ざした変革だと、指摘しています。

トリエステの精神保健サービスの実践は、隔離・疎外から、社会の包摂へ、そのための人びとの支えを築く実践でもありました。そして、生活協同組合という協同組織の存在でもありました。編集の準備の段階で全国精神医療労働組合協議会に出会いました。そして、インタビューをしました。日本は、日本の道を歩まなければならないのですが、それは、主権者国民の問題であり、精神障害者も、とうぜん主権者なのです。

（編集主幹）